

## 一般研究・試験研究要約

ここに掲載する要約は、文部省科学研究費補助金を2年間継続して受け、昭和46年3月に完了した教育心理学関係の一般研究および試験研究のものである。年報編集者から、各研究(代表)者に報告を依頼し、それに応じられたものだけが掲載されている。

### 一般研究

#### 幼児の attachment behavior に関する 比較心理学的研究

お茶の水女子大学 浅見千鶴子

**目的:** 出生間もない無力な幼児は最初、周囲の人物、物的対象に対して無差別に接触を求め、養護を全うしようとする。これがいわゆる attachment behavior と呼ばれ、微笑反応とか、刷りこみ行動の諸現象に始まり、積極的に周囲に働きかけるようになる社会的行動の発達過程の一連の現象である。この過程を人および人以下の霊長類(日本ザル)、下等哺乳類(ネズミ)、鳥類(ニワトリ)等について比較発達学の観点から観察、実験を行ない、その発達における意味を明らかにし、要因を確立することを目的とした。

**方法:** ①日本ザル幼児、飼育過程における母親代理である飼育者に対して発現させる attachment behavior の状況および条件、その発現過程の変化の観察、ならびに出産時からの母ザルに対する発現過程の観察・比較。観察個体、計8頭(飼育開始時期による比較)。②ネコ幼体2匹、生後1か月の幼体を入手し、飼育経過中における飼育者への attachment behavior の発現の観察。サルとの比較。③ネズミ、出産時より1般の幼体の発育中における handling と幼体の反応の観察。④人間幼児。正常児(生後6か月~13か月)8名および盲児(10か月~31か月)8名、それぞれ母親と他人とが接触する実験場面9場面を設定し、その条件下に発現する行動パターンを分析し、正常児と盲児との attachment behavior 発現の形式の差異を比較検討した。

**結果:** ①日本ザル幼児は約4か月令以下では無差別の clinging, feeding の状態にあり、新しい養育者に対して容易に attachment を形成させるが、6か月に達した後では全く不可能であった。3か月辺りからなれたものとなれないものとの差別がつきはじめ、特定の対象には attachment が強まるが、それ以外のものには恐れ

を示し“人見知り”が強く出現する。

5か月頃から好奇心が強くなり、特定の attachment の対象は環境探索の安全性の拠点に利用される。さらに初対面の男性人物に強い関心を示し、恐れながら接近する行動が顕著に現われる。この“とり入る態度”を示すことにより強者からの攻撃を防ぎ養護を全うする手段となる社会的調整のメカニズムの一現象と見る。

真の母子間において母親は初産で reject が頻繁に見られたが、幼児の attachment は強く、暫く必死になって母親へのしがみつきが見られた。幼児の体力がついてくるにつれて、母親から離れる時間が長くなり、6か月頃には採餌の際にはむしろ母親から素早く逃れ去る行動が発達する。しかしグルーミングや遊び行動においては母親と近親関係を維持していた。

②ネコ幼児、約1か月で母親から離し、実験室での飼育を行なったが、飼育者に対する attachment がある程度形成された。

③ネズミは handling を与えられたにも拘らず本来就巢性の動物で極めて幼弱のまま産み出され、自らは動くことができず専ら母獣の養護に頼っており、仔自身から母又は飼育者に接近することはない。母が専ら仔からの種々の sign に反応するのであり、ネズミ幼児の行動は幼児ザルとは典型的に異なる。

④人間幼児の盲児の attachment behavior は正常児に比べて、すぐに泣き行動が発現し、全体に泣く事が非常に多い。笑い行動はいずれも母に対して多いが、盲児は母の声に対しても多く出現する。発声行動は他人に対しても正常児では多いが盲児では少ない。しかし両者の差は比較的他の行動に比べて少ない。最も両者の間に差があるのは定位行動で、盲児には殆ど現れない。全体的に盲児はすべての行動型の出現数乏しく活動性少く消極的である。これは眼という感覚器官の障害によるものといえる。

脳障害による人格変化に関する神経心理学的研究

神戸大学 伊藤 隆二